

新造された小仏像の像内納入について

佐々木 守 俊

要旨

仏像の内部空間に特殊な靈性をもつ古像が納入される例は多い。だが、納入される仏像（胎内仏）には新造されたものも存在する。本稿の目的は新規に造立された仏像を他の像に納入することの意義を考察することである。

吉祥寺吉祥天立像と歓喜寺地藏菩薩坐像は新像を古像に納入する例である。この場合、小像の保護の意味で既存の古像を利用した可能性がありうる。ただし、清水寺阿彌陀如来立像は内外の像を同時に造立したこと、主体は内部の金銅製小像ではなく外側の木像であることが確実である。同様の例に『玉藥』に記される、尊性法親王が九条兼実に造らせた金像がある。『文殊涅槃經』の記載を参考にすると、これらの例は像内の小像を真正なものと認識していた可能性が考えられる。真正なものの納入という行為をもつともよく象徴するのが、西大寺大黒天立像などのケースである。これらの像では、ほとけの魂とされる心月輪として小仏像が納入されている。いっぽう、伝香寺地藏菩薩立像などのように、小像の納入の目的が真正なものの設置とは即断できないケースも存在する。これらのケースには、内外の像の組み合わせによってある特別な意味を表現する意図が見いだせる。また、『法華山寺縁起』によれば、慶政は大日如来像と小像九体を同じ材から造立し、小像を大日如来像に納入している。この例では、大日と胎内仏のくみあわせには特定の意味はないと考えられ、本体と胎内仏のいずれが真正であるかという問いは無意味である。

また、仏像の内部に同じ種類の小像を大量に納入するケースのうち、寂光院地藏菩薩立像などの『千体地藏』は『地藏菩薩本願經』を典拠として、世界に遍満した地藏菩薩の分身が集結して一体に戻る場面を造形化したものとみなされる。

仏像が同時に造立された小像を内包することは、当初から「内部にもう一つの像をもつ像」として企図されたことを意味する。二重構造をもっていることじたいが、像の靈性を保証するともいえるだろう。

はじめに

仏像の内部空間に別の小仏像を納入するといえ、特殊な靈性をも

つ古像のために入れ物となる新像（鞘仏）を用意した例がまず想起される。だが、納入される仏像（胎内仏）には新造されたものも存在する¹。筆者はかつて古像の納入について、胎内仏にとっては鞘仏による

保護であるが、外側の像からすれば古像の靈性を継承する意味合いがあり、胎内仏にたいして副次的な存在であることを意味する「鞘仏」との呼称がふさわしくない例もあることを指摘した²。胎内仏の靈性を保証する属性としては材料の価値とともに来歴の特殊性が挙げられるが、造立とともに納入品とされた像のばあい、来歴が価値をもつことはありえない。新像の納入にはそれ特有の意味があったことになるう。

本稿では新像を納入する諸像に注目し、内外二重構造が採用された理由を考察する。そのうえで、一部の作例では二重構造をなすこと以上に、内外の像が総体で特別な構成をなすことが重視されていた可能性があることを指摘したい。

一、古像への新像の納入

多武峯談山神社の藤原鎌足（大織冠）像は、新像の内部に根本像が納入されていることで知られていた。承元二年（一二〇八）、新像（等身御影、上御影）からとり出されていた根本像（三尺御影、中御影）が焼失した。近衛家実（一二七九〜一二四二）の日記『猪隈関白記』同年閏四月十九日条には、焼失した三尺御影を新造するかという問題について、公卿たちが意見をかわしたさまが詳述されている³。公卿の

大方は新造は不要と考えたが、とくに藤原長兼（生没年不詳）の三尺御影を新造して既存の等身御影に納入しては前後が逆転してしまう、との意見【史料 1】は注目される。ここには納入される像は由緒ある古像であるべき、との認識がよみとれるが、否決されたとはいえ、納入品である三尺御影を新造する可能性が議論されたことはみのがせない。

滋賀・吉祥寺（井上自治会）吉祥天立像は十一世紀の作とみなされているが、像内には正応四年（一二九一）の造像銘【史料 2a】をもつ如意輪観音菩薩坐像が納入されている⁴。如意輪像は素地仕上げの代用檀像で、天福元年（一二三三）の奈良・広瀬区十一面観音菩薩立像のような古い檀像（または代用檀像）を納入品とする作例との類似を思わせるが、納入品のほうが新しい点で異なる。新しい鞘仏によって古い靈像を保護する、または納入された古像の靈性を新像に継承させるといふ、二重構造をなす仏像の多くに想定される納入意図が、吉祥寺像にはみいだせないのである。

吉祥寺像の像内には如意輪像を安置するための棚板がしつらえられ、嘉元四年（一二三〇・六）の年紀、如意輪像の造像銘にもあらわれる「琳賢」の名、そして「本尊如意輪観世音菩薩」の呼称が墨書される【史料 2c】。「本尊」との呼称は、如意輪像の台座框裏にも「嘉元□年」に「入置タテマツル」旨や「琳賢」の名とともに明記されており【史

料2b)、如意輪像が「本尊」と認識されていたことはあきらかである。これは寺院や堂宇の本尊という意味ではなく、吉祥天にたいしての観音の位置づけをあらわした呼称と考えられる。時代は下るにもかかわらず、如意輪像は吉祥天の本地仏的な存在であること⁵⁾、代用檀像であることを根拠に「本尊」として遇された。そして、吉祥天像は如意輪像を納入することで、より高次の尊格である本地仏の靈性をも獲得したとのみかたがいちおう可能だろう。

和歌山・歓喜寺地藏菩薩坐像は、九世紀末〜十世紀前半ころの造立で重要文化財に指定されているが、別に厨子入りの地藏菩薩の小坐像が存在する。文化四年(一八〇七)の奥書をもつ「歓喜寺什宝由緒書写」には、この「小像」は寛文四年(一六六四)に「大地蔵胎内」から発見されたことが記されており、それまで重文像に納入されていたことが判明する⁶⁾。内外の像は同一尊なので本迹関係はありえず、「小像」は彩色像なので、吉祥寺の如意輪像のように檀像としての靈性が期待されたとはいえない。だが、像高三・三センチ、総高一・八センチという極小の像でありながら、光背・台座をふくめて細緻に表現された像容と入念な彩色は、「小像」が特別な信仰のもとに造られた経緯を想像させる。

しかし、吉祥寺像および歓喜寺像の胎内仏は、古像に靈性を付与するために造立されたとはいえない。吉祥寺像のばあい、如意輪像

の造立から吉祥天像への納入までに十五年も経過しており、はじめから納入を前提として造立されたとは考えにくい。内外の像はほんらい無関係だったのだろう。古像の納入でみられるように、如意輪像を保護する目的で吉祥天像に納入した可能性もありえる。

歓喜寺の胎内仏について、大河内智之氏は一二二〇〜三〇年代に念持仏として造立され、建長元年(一二四九)の寺創建にあたつて重文像に納入されたとの経緯を想定している⁷⁾。造立から納入までにかかりの時間が経過しているならば、吉祥寺像のばあいとおなじく、納入の目的は一概にいないこととなる。既存の像を新像に納入するにあつては、造立年代の古さや伝来、材料の特殊性が説得力につながっていた⁸⁾。すると、納入に足る属性が認められるなら、胎内仏は新像であつてもよいことになるだろう。ただし、造立の段階で納入が前提とされていたか否かは、文字情報がないかぎり断定しにくいのである。

古像の納入でも、既存の像を鞘仏としたケースがありうるようである。この問題を考えるために、中国唐代の史料に目を向けてみたい。道宣(五九六〜六六七)の『集神州三宝感通録』には、長安の日嚴寺にまつられた「石影像」にかんする条がある。石影像は「八楞紫石英色、高八寸、径五寸」で、梁の太清年中(五四七〜五四九)に西域の僧が「将来」(請来)したが、侯景の乱(五四八〜五五二)にさいして「廬山西林寺像の頂上に安ん」ぜられた。のちに隋の煬帝(五六九

（六一八）がこれを石巖寺に安置した【史料3】。西林寺像への安置にかんしては、保護の意志を認める解釈と疑問視する解釈がある。¹¹ 西林寺像が現存しない以上、石影像の安置状況は不明とせざるをえないが、その移動が侯景の乱を契機としていることから、保護の意志を認めてよいのではないだろうか。

石影像の例は通常の像内納入とはかなり形態が異なるが、小像を別の像で保護する点では共通する。日本と異なり、中国では小仏像の像内納入の事例がほとんど知られていない¹²。そうした状況下で、本条は隋・唐代における霊像へのまなざしとその保護のための他像の利用をものがたる史料として、像内納入品研究のうえで重要性が高い。

西林寺像が石影像のために新造された可能性は皆無ではないものの、文脈からは非常事態にさいして石影像を受け入れた、ほんらい無関係の既存の像だったように思われる。別々に存在していた二つの像がくみあわされ、二重構造をなすケースは少なからずあったのではないだろうか。外側の像のほうが古くても、内部の新像はかならずしも納入を前提に造立されたとはいえないのである。

二、内外の像の同時造立

ところが、外側の像と同時に小像が納入を前提に造立されたことが

確実な例が知られている。京都市北区・清水寺阿弥陀如来立像は、納入品の造像願文【史料4】に嘉禎元年、法華經の奥書に文暦二年（いずれも西暦一二三五年）の年紀があり、そのころの造立と考えられている。外側の木像（図1）は像高七九・〇センチで、像内には像高四・六センチの銅造阿弥陀如来立像（図2）を納入しており、いずれも両手の第一・二指を捻ずる¹³。造像願文には「奉造立阿弥陀仏像一体三寸奉鑄頭金銅阿弥陀仏一体御身ニ奉籠」との記載があり、内外の二像が同時に造立され

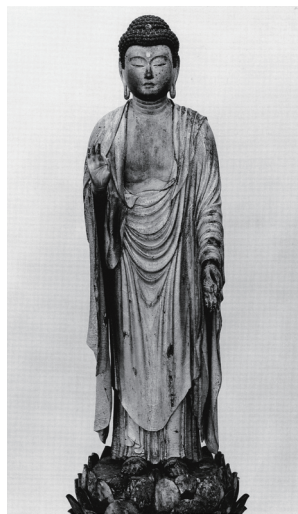


図1 阿弥陀如来立像
清水寺蔵



図2 阿弥陀如来立像（胎内仏）
清水寺蔵

時に造立されたこと、木像の供養時には「金銅阿弥陀仏」が「御身」に「奉籠」されたことは疑いない。

内外の像の造立が同時であつても、小像をより貴重なものとしな

し、保護のための鞘仏を用意したとの想定も不可能ではない。しかし、清水寺像の造像願文はまず木像を話題にし、つぎに胎内仏の「鑄頸」に触れていることから、重点がおかれていたのは木像とみられる。ただし、胎内仏が金銅製である点は、外側の木像にたいして材質の面で特殊性を主張する仕様と理解される。本像のばあい、当初から「内部にもう一つの像をもつ像」の造立を意識しつつ、内部の像に特別な意味を籠めたと考えられよう。

九条道家(一一九三～一二五二)の日記『玉藥』嘉禎四年(一二三八)二月七日条【史料5】に記載される不動明王像は、清水寺像と類似した造立事情が推察される。道家は尊性法親王(一一九四～一二三九)建立の「御祈願堂」の「本尊不動」に「奉籠」するために、「金御仏」を「鑄奉」つたという。奥健夫氏は納入のための小像が新造された例としてこの記述を挙げ、納入の根拠として金製のような本体にない価値が必要とされたことを説いている。¹⁴ 特別な由緒をもたない新像を納入品とする二重構造の像が、尊性や道家のような貴顕の周辺で受容されていたことを本史料はものがたる。

「金御仏」の納入からは、最道真(生没年不詳)訳『仏説文殊師利般涅槃經』(以下『文殊涅槃經』)にみえる「真金像」にかんする記述が想起される。筆者はこれまでもこの「真金像」について言及してきたが、¹⁵ 小像、とくに新像の像内納入と深くかわる問題であるため、

この場で再論したい。『文殊涅槃經』は「正長丈六」の文殊像の「身心処」、すなわち胸部の内奥に「正長六尺」の「真金像」が存在すると説く。¹⁶ 道家が鑄造した「金御仏」の尊格は不動明王と考えるのが自然だが、この「真金像」と通じる性格が想定される。金像の納入は特殊な事例といえるが、銀像や銅像もふくめれば、金属製の胎内仏は史料上の記載もふくめてかなり知られている。これらは「真金像」に匹敵する存在だったのではないだろうか。『文殊涅槃經』にもとづけば、重要なのは胎内仏の由緒や古さよりも材質であり、新像であつてもかまわないことになろう。さらには、「真」なるものを内包する二重構造そのものが重視されたとも想像される。

『玉藥』と『文殊涅槃經』の記載は、清水寺の内外の阿弥陀像の同時造立がけつして例外でなく、ほかにも同様のケースがありうることを示唆しているよう。まずは後鳥羽上皇(一一八〇～一二三九)御願の院最勝講の本尊とされた四天王像についてみてゆきたい。葉室定嗣(一二〇八～一二七二)の日記『葉黄記』宝治二年(一二四八)四月二十七日条によれば、後嵯峨上皇(一二二〇～一二七二)の院最勝講再興にあたり、後鳥羽が元久三年(一二〇六)に供養した四天王像(焼失)の例にのつとつて本尊像を新造することになり、仏師は湛慶(一二七三～一二五六)が起用された。像の高さを九寸とすることや安置形態などはみな「元久例」を踏襲したが、「御胸」の中に「高さ

一寸」の「金の四天」像を籠めることは省略されたという【史料6】。後鳥羽御願像の胸部に納入されていたという金製の四天王の小像が新像だったのかは明記されていないが、少なくとも古い霊像を納入したとの記述はない。もし後嵯峨御願像が金の小像を納入する点でも「元久例」にならっていたならば、納入像は本体とともに新造されていただろう。

『文殊涅槃經』との関連からすれば、内外ともに文殊菩薩像という作例は注目に値する。正安四年（一三〇二）の奈良・西大寺文殊菩薩坐像の納入品には文殊菩薩立像がふくまれている。¹⁸ 文殊立像は素地仕上げの木像で、檀像を意識したもののだろう。弓なりに背筋を反らした立ち姿や、切れ味の鋭い衣文線は平安時代初期の檀像を思わせるが、目尻の吊り上がったくせの強い表情は鎌倉時代後期風で、他の納入品と同様、文殊坐像への納入を前提に造立されたとみておきたい。

京都・大智寺文殊菩薩坐像は、首柄内に厨子入りの文殊菩薩の小坐像が納入されていることがX線CTスキャン調査によって判明した。像内は納入時の状況が保たれていると判断され、胎内仏は外側の像より造立年代が下ることはありえない。¹⁹ 元徳二年（一二三〇）の奥書をもつ『橋柱寺縁起』には、泉大橋の橋柱を御衣木として本尊像を造り、文保二年（一二一八）に橋柱寺（現在の大智寺）を供養したとの記述がある。本像はこの本尊像にあたるとみられ、作風も鎌倉時代末

期と推定されている。胎内仏は像高二・七センチの極小像でありながら、各部の比率がととのった体軀、肘と膝を大きく張った堂々たる姿勢は、鎌倉時代の作であることをものがたる。造立年代の絞り込みはむずかしいが、外側の像と同時にある可能性はじゅうぶんに考えられる。

文殊以外の作例では、滋賀・延暦寺護法童子立像の頭部から銅造不動明王立像が発見されている。²⁰ 内外の像はともに十四世紀の作風をしめし、同時に造立された可能性が考えられる。十三世紀後半の奈良・成福寺聖徳太子立像はX線CTスキャン調査により、四天王寺本尊の救世観音像をかたどつたとみられる木製の小像と鈿物質の物品が像内胸部に発見された。このケースは、太子の本地仏である救世観音が「真」なるものと位置づけられ、内外同時に造立された可能性が考えられる。なお、救世観音像の表面には彩色層が確認できないことから、山口隆介氏はこの小像を「檀像に見立てた由緒ある霊像の模像」と理解し、これと「舍利に擬えた品々を納入することで、像に生身性を付与する」意図を指摘している。²¹

胎内仏の納入の意義が生身性の付与であるならば、胎内仏はどのような存在にとらえられていたのだろうか。手がかりになるのは諸史料にみる胎内仏の呼称である。丈六文珠の胸部に「真金像」が内包されているという『文殊涅槃經』の経説は、内部の像が真正なものとの理

解をしめす。この考えを仏像に敷衍すれば、像内に秘匿されて不可視の状態にある真正な存在にたいし、外側の像が実体のある「生身」と理解されていたと考えることは可能だろう。

吉祥寺如意輪観音像が嘉元四年の納入の時点で「本尊」と呼ばれていたように、胎内仏には「本」、すなわち根本的・本質的なものとの理解もみいだされる。尋尊（一四三〇～一五〇八）の『大乘院寺社雜事記』文明十九年（一四八七）八月六日条には、奈良・福智院地藏菩薩坐像にかんする言及がある。本像は建仁三年（一二〇三）に造立のための勧進がはじまり、建長六年（一二五四）に完成されたことが造像銘から知られるが、尋尊は「本尊」の「御腹内」に「大明神御作」の「本仏」が納入されていると記す【史料7】。福智院には本像とは別に厨子入りの地藏菩薩の小坐像が伝来する。水野敬三郎氏はこれを十三世紀後半の造立とみたうえで、尋尊が言及する「本仏」に該当する可能性を指摘し、「これが腹内にあつた可能性も全くは否定できない」とのべる。²² 注目したいのは、尋尊が外側の像を「本尊」、内部の像を「本仏」と区別していることである。ここでは「本尊」が寺の本尊を意味しているのにたいし、「大明神御作」との権威づけをとまなつて使用されている「本仏」は、より根本的・本質的なほとけとの理解をしめしている。

一行（六八三～七二七）記『大毘盧遮那成仏経疏』（『大日経疏』）

には、「本尊の心上の円明浄鏡」（心月輪）のなかに「本尊」が存在するさまの観想法が説かれる。²³ この記述は、保安元年（一二〇〇）の京都・広隆寺聖徳太子立像の納入品のような、尊像をあらわした心月輪の像内納入の根拠と目されるが、胎内仏との関連もみのがせない。「本尊」の内部の鏡中に「本尊」が存在するとの言い回しだけからは、内外どちらの「本尊」が重要かわからないが、続く「即ちこれ真に仏を見るなり」との記述は、鏡中の「本尊」までを観想することが「真」の見仏であるとの考えをしめしている。²⁵ 内奥の「本尊」こそ「真」に近いとの説は、『文殊涅槃経』の経説、また吉祥寺像や福智院像の胎内仏に向けられた視線と通じる。新像にもかかわらず胎内仏とされたのは、「真」なるもの、「本」なるものを内在するほとけの具現化という目的があつてのことだろう。

本節でとりあげた作例はすべて鎌倉時代のものだが、康和五年（一一〇三）から嘉承二年のあいだの造立と考えられている和歌山・金剛峯寺毘沙門天立像の像内には、ビヤクダン製とみられる毘沙門天立像が納入されていた。この胎内仏は台座框がうしなわれた状態で発見されたことから伝世品だったと推定されているが、様式的には内外の像にさほど年代差は認められない。²⁶ これも内外二像の同時造立が確実視される、清水寺像のような作例に類似するものと位置づけられよう。

三、心月輪を兼ねる胎内仏

前節では『大日経疏』の記述にふれながら、円明（月輪）と同一視される鏡中の「本尊」が胎内仏に通じる性格をもつことを考察した。じつさいに胎内仏はときに心月輪と一体化することがある。

代表的な例が建治二年（一二七六）の西大寺大黒天立像（図3）である。本像には円形の曲物におさめられた銅造弁才天懸仏（図4）な



図3 大黒天立像 西大寺蔵



図4 弁才天懸仏 西大寺蔵

どが納入されていた。この懸仏は心月輪とみなされ、弁才天像のはつらつとした表情や自然な動きから、大黒天像と同時の作とみてさしつかえない。このほか、左脚を踏み下げた大黒天の小坐像も納入さ

れており、素木像であることは他の胎内仏の多くと共通する。南北朝時代の大黒天画像（個人像）では、左肩に背負った袋が円相となり、その円相いっばいに童子をしたがえた弁才天と稲荷神が描かれている。この構成には、西大寺像に弁才天懸仏が納入されたのと同様の思想的背景が指摘されている。²⁸

心月輪との関係が深いと目される小像を納入するのが、兵庫・宝満寺胎藏界大日如来坐像である。同寺には金剛界大日如来の小坐像が伝来しており、胎藏界像の納入品だったと伝える。胎藏界像の像内正面胸部には蓮台がしつらえられ、蓮台の上面にある痕跡と金剛界像の台座底面の輪郭が一致することから、納入は事実と認められる。²⁹ 金剛界像は像高四・〇センチの彩色像で、小像に特有のあどけない表情をしめすが、首が太く重心が低い体つきや強い膝張りは胎藏界像に通じ、納入を前提とする同時の造立が考えられる。胎藏界像の体幹部前面材の内割り面には金箔が押され、銘文が朱書される。注目されるのは、蓮台の上方に大きめの卍と「心月輪」の文字が書かれていることである【史料8】。蓮台に金剛界像を据えた状態では、像と「心月輪」の朱書は重なりあうことになる。円相こそもうけられていないものの、金剛界像と「心月輪」の文字をあわせて尊像タイプの心月輪を形成したとの解釈は可能だろう。

心月輪は仏像の魂、菩提心として納入される。³⁰ 心月輪型の胎内仏は

「真」なるもの、「本」なるものとしての性格を、密教的な解釈によつてもつとも象徴的にあらわしたものといえる。特殊な例に、弘安七年（一二八四）までの造立と考えられる愛知・甚目寺愛染明王坐像がある。二〇一〇年の解体修理のさい、本像の像内胸部から半球状の合子が発見され、内部にはビヤクダン材に彩色をほどこした愛染明王像がおさめられていた。³¹ 合子内の愛染像は像高六・六センチの小像ながら彫刻と彩色はきわめて細緻で、張りのある丸顔といきいきとした忿怒相は外側の愛染像より若々しく、見田隆鑑氏が指摘するとおり造立はややかかのぼるものとみられる。とはいえ、内外の像の年代差はさほどなく、納入は古像の保護を意図したものではありえない。

山岸公基氏は一九九六年のファイバースコープ調査の段階で、像内胸部に半球状の納入品が存在することを確認し、これが心月輪にあたる可能性を検証した。³³ これにたいし、見田氏は解体修理の結果を受け、合子が赤く彩色されていることから、心臓にあたる「訶栗駄心」または「肉団心」を意識したものとの見解をしめした。³⁴ ただし、訶栗駄心（肉団心）をあらわすなら赤い球だけでじゅうぶんだったといえ、わざわざ合子の内部に細緻な小愛染像をおさめる必要はなかったかもしれない。ここには西大寺像とおなじく、心月輪納入の発想が波及しているともいたい。心月輪はふつう円盤状だが、建暦二年（一二二二）の奈良・興福寺北円堂弥勒仏坐像の納入品など、少数だが球形のものも存

在する。合子におさめられた小愛染像は、尊像をあらわす心月輪と球状の心月輪を折衷したタイプともみなされよう。

四、内外の像による特別な構成

ここまで言及した新像の像内納入は、仏像が二重構造をとること
で真正なもの、本質的なものを内包するための仕様とみなされる。ただし、この考え方をあてはめにくい事例も存在する。たとえば、前節でふれた宝満寺大日像の胎内仏には特別な材料は使用されていない。むしろここでは、胎内仏に心月輪としての性格を兼ねさせるとともに、外側の胎藏界大日像と内部の金剛界大日像を一对として、金胎不二の理念を具現化することが構成の主眼だったとみるべきだろう。本節では、これと同様に内外の像がそろうことで特別な意味をなす諸例について検討したい。

よく知られている例としては、まずは安貞二年（一二二八）の伝香寺地藏菩薩立像が挙げられる。³⁵ 本像には舍利三粒をおさめた青瑠璃製舍利壺、經典類、三通の願文とともに、薬師如来像と十一面観音菩薩立像が納入されていた。薬師如来像がビヤクダン製の檀像であるのにたいし、十一面像は針葉樹材をもちいた素木像で、代用檀像といえるものである。比丘尼妙法の願文【史料9】は仏像類を「多年所持の

本尊」と呼んでおり、新造されたものではないと理解されるが、十一面像には地藏像とともに善円（一一九七～一二五八）の作風が指摘されており、³⁶ 地藏像と類似した環境でさほど年代をさかのぼることなく造立された可能性が考えられる。

妙法願文によれば、仏舍利と薬師如来像は「仏宝」、經典類は「法宝」、十一面像は「僧宝」にあたり、全体で三宝をあらわしているという。加えて、仏舍利（＝釈迦如来）・薬師・地藏・十一面は妙法願文にいう「春日四所」の本地仏を意味する。³⁷ 十一面像が右手で錫杖を執る長谷寺式であることは定評ある霊験像への信仰を思わせ、地藏像への霊性の付与が納入の一因であることはまちがいない。しかし、内外の像の構成がうみ出す重層的な意味こそ、本像に寄せられた信仰の本質といえるだろう。

建長元年（一二四九）に康円（一二〇七？）が造立したケルン東洋美術館地藏菩薩立像（図5）は、銅造の釈迦如来立像と阿弥陀如来



図5 地藏菩薩立像
ケルン東洋美術館蔵

立像（図6）を納入する。「地藏菩薩御身中奉納仏經等目錄」によれば、釈迦像



図6 釈迦如来立像（右）・阿弥陀如来立像（中）
ケルン東洋美術館蔵

（一〇一七）造立の像とは、比叡山横川の戒心谷知見坊に安置されていた地藏菩薩像のことで、複数の模刻像が現存することから、原像に寄せられていた信仰の篤さがおしはかられる。ケルン像と胎内仏の構成には著名な霊験像の模刻像を集積し、一体化する意図がみいだされるのである。³⁸

同時に造られた内外の像が総体でなんらかの意味をあらわしていると思われる例に、慶政（一一八九～一二六八）の『法華山寺縁起』に記載される大日如来像がある。慶政は渡宋のさい「洋浪」によつて船の「梶」（舵）を破壊された。しかし「種々願を發して（破壊された舵を）御素木に擬することを誓ひ」、「大唐福州菅唐山」にたどり着く

は「嵯峨尺迦」（京都・清凉寺釈迦如来立像）、阿弥陀像は「真如堂阿弥陀」（京都・真正極楽寺阿弥陀如来立像）を「摸し奉」つたものだという【史料10a】。さらに、願書には地藏像が「源信僧都造立し奉る像を摸し奉る」との記述がある【史料10b】。源信（九四二

ことができた。帰朝後、慶政は「此の梶を用ひ」大日如来像を造立した。さらに「同木を以て一寸六分尺迦・阿弥陀・葉師・弥勒・観音・文殊・地藏・不動・大威徳像を造立し、御身の中に籠め奉」った。これらの胎内仏は「皆渡海の時願を立つる形像」だったという【史料11】。重要なのは、大日像の「御素木」（御衣木）とされたのが水難をまぬがれた船の舵だったこと、釈迦以下の胎内仏にも同材が使用されたことである。慶政がめざしたのは、救済の象徴である舵の材を使用して内外の像をそろえ、危難からの脱出を記念することだった。外側の像と胎内仏のいずれが「真」であるかという問いは無意味で、内外同時造立にはこうした事情もありうるのである。

五、千体造像と像内納入

鎌倉時代の仏像には、大きめの像に同一尊格の小像を大量に納入した例が複数みられる。とくにめだつのはいわゆる「千体地藏」で、寛喜元年（一二二九）の京都・寂光院像³⁹、建長六年（一二五四）の滋賀・長命寺像⁴⁰、正和元年（一二三二）の京都・神光院像⁴¹はいずれも像内に大量の小像を納入する。このほか、康元元年（一二五六）の神奈川・正眼寺像は多様な納入品のなかに地藏菩薩立像が二軀、千手観音菩薩立像が一軀ふくまれている⁴²。前者は寂光院や神光院の小像と通じる素

朴ながら愛らしい像で、ほんらいは千体地藏だった可能性が考えられる。

地藏像以外の現存作例には仁治三年（一二四一）の浄瑠璃寺馬頭観音菩薩立像⁴³、十三世紀の愛知・赤岩寺愛染明王坐像⁴⁴がある。史料上に記載のある像に、弘安六年（一二八三）に造立された広島・厳島神社の「等身白檀大日如来像」がある。造立願文【史料12】によれば、本像の「胎内」には「三寸二分同像一千軀」が納入されており、「其の三軀」は願主の佐伯親盛が「沐浴潔斎して手自ら造立」したという。胎内仏に籠められた意味や納入の動機は明記されていない。しかし、造像事情を推定するカギは、千体像のうち三体が願主親盛みずからの造像とある点だと思われる。この記述は、三体以外の大多数の像は別人が関与して造像されたことを意味する。

参考にするべきは、近衛兼経（一二一〇～一二五九）の日記『岡屋関白記』の記述だろう【史料13】。寛元四年（一二四六）二月二十五日、兼経は三尺愛染明王像の造立を開始した。四月十九日には愛染像が「堀川」の「堂廊」に安置され、「人々が造り奉」った「千軀愛染王」も安置されたが、「愛染王像の中に籠め奉る物」として「仏舍利一粒」などが列記されるなかに「千軀愛染像」はふくまれず、像内納入品ではなかったことがわかる。

千体愛染像について注意したいのは「人々」、つまり複数の人物が

分担して造像した形跡である。この造像過程は鎌倉時代に流行した、印仏を使用しての勧進とその像内納入をほうふつとさせる。兼経の千体愛染像は納入されることはなかった。これにたいし、嚴島の千体大日像はやはり複数名が関与したとみられること、さらに像内納入がおこなわれていることから、結縁者が白檀大日像に直接アクセスする媒介として機能したのかもしれない。

兼経の千体愛染像、親盛の千体大日像は文字史料から察するかぎり、多数尊の集積に造像の意義があったと推測され、千体が完備していること以上の特別な意味を構成にみいだすことはできない。いっぽう、地藏菩薩像のばあいは事情が異なるようである。林温氏は奈良国立博物館本千体地藏菩薩図に関する考察において、実叉難陀（六五二〜七一〇）訳『地藏菩薩本願経』（以下『本願経』）を、千体地藏造像の教義的な典拠と指摘した。⁴⁵ 同経「分身集会本」には、「百千万億不可思不可議不可量不可説無量阿僧祇世界」の「分身地藏菩薩」が「俱来集して忉利天宫に在」ったとの記述【史料14】がある。また、端拱二年（九八九）の常謹（生没年不詳）撰『地藏菩薩應驗記』所収「大周尚書伯悅為妻造地藏感通記第十九」には、忉利天の「善法堂」に「三千界化身地藏」が「集会」するさまが語られている。⁴⁶ これらに照らせば、奈良博本に描かれる大量の地藏は「分身」（化身）であることがわかる。

彫像でも小像を林立させた作例がある。十三世紀の京都・報恩寺像は大きめの地藏坐像を岩山の中心に配し、周囲には分身の地藏立像をびつしりとならべる異色の作例である。また、後鳥羽上皇御願の水無瀬殿御堂（現在の大阪府）には千体地藏像が安置されていたことが、『源家長日記』元久二年（一二〇五）十月二十七日条⁴⁷から知られる。家長（一二七〇?〜一二三四）は、この日供養された水無瀬殿御堂（蓮華寿院）に、後鳥羽がみずから開眼した「同身」（等身）の「千体のちそう」がならべて安置されていたことを記している。⁴⁸ 『本願経』に説く、地藏の分身が「百千万億恒河沙世界に遍満」するようすを表現するには、ならべて安置するのが適切ともいえよう。

水無瀬殿のような特別な場では等身の千体地藏を林立させることも可能だが、等身の千体像を安置するには巨大な堂宇が必要で、よほどの有力者でないかぎり実現はむずかしい。だが、報恩寺像のように全体をごく小さくしたり、福智院像のように光背に分身を配することは可能であり、中央の本体のみ大きく造り、分身を周囲の棚にずらりとならべる例は各所で知られている。そのような選択肢にたいし、分身の納入には特別な意味がみいだされていたのではないだろうか。

『本願経』には、釈迦の付嘱のことばを受けた「諸世界分身地藏菩薩」が「共に一形に復して涕淚哀恋」したとの記述がある。大量の小像を像内に収めた本体は、分身が一形（一体）に復した状態を表現してい

るものと考えられる。地蔵の分身が世界に遍満するさまも、再び集結して一体化するさまも『本願経』での説明が可能だが、後者は「切利天の付囑」という、地蔵の重要なエピソードを造形化したと考えられるのである。

千体地蔵の小像は『本願経』によれば「分身」、『地蔵菩薩応現記』によれば「化身」にあたる。第二・三節でみてきた新像の納入例のように、胎内仏と本体の関係を真正なもの、本質的なものの内包と理解するだけでは、寂光院像をはじめとする諸像の納入の論理はよみとけない。千体地蔵の納入は、世界に遍満する地蔵の分身（化身）が釈迦の付囑をきっかけに再結集、一体化するという壮大なドラマを造形したものと考察される。

おわりに

仏像が同時に造立された小像を内包することは、当初から「内部にもう一つの像をもつ像」として企図されたことを意味する。このケースは古像の納入と異なり、由緒ある像の保護や靈性の継承という意味あい指摘できない。だが、真正なもの・本質的なものの内在を表現することは古像を使用しなくても可能である。二重構造をもっていることじたいが、像の靈性を保証するともいえるだろう。

複数の像のくみあわせによって特別な意味を創出する例がしばしばみられることも、新像を納入する仏像の特徴である。これらの作例を視野におさめることで、小仏像の納入にたいする認識は大きく変化するのである。

史料

・割注は（）、改行は／で示した。
・造像銘記など、原本の字配りの再現が必要と思われる史料については、可能な限りおこなった。

【史料1】近衛家実『猪隈関白記』承元二年（一二〇八）閏四月十九日条（東京大学史料編纂所編『大日本古記録 猪隈関白記』四、岩波書店、一九八〇年）

（前略）於今度者、弥不可及新造之沙汰歟、彼三尺御影、安置年久靈異揭焉、仍尊崇之余、奉籠于等身御影之中歟、件等身御影靈驗又新歟、今幸通余焰畢、而以新造奉籠旧跡之条、已前後相違歟、不可然候歟、（後略）

【史料2】吉祥寺吉祥天立像および如意輪観音菩薩坐像銘文（山本勉

「如意輪觀音菩薩像 吉祥寺（井上自治会）」（水野敬三郎編『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇』一四、二〇一八年）

（a）如意輪觀音菩薩坐像台座反花裏墨書）

正応三年（辛卯）／八月 十八日／造立之仏子定円／同日建立之／沙門琳賢

（b）同像台座框裏墨書）

入置タテマ

ツル

智忍

本尊

琳賢（花押）

嘉元□年□月

（c）吉祥天立像像内棚板裏墨書）

嘉元四年九月廿五／本尊如意輪觀世音／菩薩僧琳賢（花押）／法華經一部智忍（花押）／不動經典一卷

【史料3】道宣『集神州三宝感通録』（肥田路美編『美術史料として読む『集神州三宝感通録』―釈読と研究―』一〇、早稲田大学大学院東洋美術史、二〇一七年）

三十八、隋京師日嚴寺石影像者、其像八楞紫石英色、高八寸、径五寸、内外映徹、昔、梁武太清年中、有西域僧将来、会侯景作乱、遂安江州廬山西林寺像頂上、隋開皇十年、煬帝鎮於揚越、広搜英異、江表文記悉總収集、乃於雜記中得影像伝、即令舍人王延寿往寺推覓、得之、（後略）

【史料4】清水寺阿弥陀如来立像像内納入造像願文（根立健介「阿弥陀如来像 清水寺」〈水野敬三郎編『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇』五、中央公論美術出版、二〇〇七年）

敬白 比丘尼善阿弥陀仏

奉造立阿弥陀仏像一_三尺_三奉_三鑄_三鍮_三金_三銅_三阿_三弥_三陀_三仏_三一_三体_三御_三身_三奉_三籠_三

奉書写妙法蓮花經一部八卷

（中略）

右志者 奉為信心大法主沙弥昇蓮

比丘尼善阿弥陀仏現当二世悉地成就
円満兼又過去尊成仏得道故也

嘉禎元年 十一月廿六日 昇蓮 敬白

善阿弥陀仏敬白

【史料5】九条道家『玉蘂』嘉禎四年（一二三八）二月七日条（今川
文雄校訂『玉蘂』思文閣出版、一九八四年）

（前略）此間宮座主被参、可謁之由被命、仍於黒戸辺対面、天王寺胡
飲酒間事有被示之旨、又吉田山庄立御祈願堂、本尊不動、其内可奉籠
金御仏、件御仏先日依被申請、為予沙汰奉鑄也、（後略）

【史料6】葉室定嗣『葉黄記』宝治二年（一二四八）四月二十七日条（『史
料纂集 葉黄記』二、続群書類従完成会、二〇〇四年）

廿七日甲辰、晴、参院、今日最勝講御本尊料被供養最勝王経、後鳥羽
院御時元久三年三月廿二日先被供養御本尊（御導師公胤僧正）、以彼
御本尊年々被用之、承久乱逆之時被渡進梶井宮、仍被尋申処、於三条
殿焼失云々、仍就元久例新被造立之、金泥最勝王経十卷（水精軸、経

師良延調之、砂金三両下給之、其外事成功也）奉納金銅透筒（細工所
調之）、奉安時給御厨子（居時給台、細工所同調之於砂金者、自御所
下給之）、彼厨子四角被立四天王像（高各九寸、毘沙門天御手ノ上ノ
塔二奉納仏舍利三粒、件塔用銀、是等皆元久例也、彼例四天王御胸ノ中
二被籠金ノ四天（高一寸）、於今度者、彼略此事、（仏師湛慶法印奉之、
（後略）

【史料7】尋尊『大乘院寺社雜事記』文明十九年（二四八七）八月六
日条（竹内理三編『続史料大成 大乘院寺社雜事記』九、臨川書店、
一九七八年）

福智院勸進帳草案自光明院内々進之、巨細仰合之、本尊八建長二年三
月廿二日造立云云、本仏八大明神御作、奉納御腹内云云、今堂八弘安
二自福智院引資遷之、興正并 勸云云、
（通説之）

【史料8】宝満寺大日如来坐像像内体部正面朱書（奥健夫「大日如来
像 宝満寺」（水野敬三郎編『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代
造像銘記篇』一五、中央公論美術出版、二〇一九年）

(前略)

日

出 心月輪

日

(後略)

【史料9】伝香寺地藏菩薩立像像内納入比丘尼妙法願文(岩田茂樹「地藏菩薩像 伝香寺」〈水野敬三郎編『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇』四、中央公論美術出版、二〇〇六年))

(前略) 仍奉造／立三尺地藏菩薩形像一体御身中奉納○／仏舍利一粒葉師如来像一体(已上仏宝)般若心／経妙法蓮華経解深密経(已上法宝)十一面観／自在菩薩像一軀(已上僧宝)或多年所持之／本尊納金剛堅固之蔵或今度返写／之経王撰究竟大乘之要凡厥三宝皆／納一体加之□^(異力)成然ト居於南都／宿因所催結縁然中宗二世之願望／悉持春日四所冥助今之所持自／当権現御本地事之自然不可不奇矣(後略)

【史料10】ケルン東洋美術館地藏菩薩立像像内納入品(根立研介・奥健夫「地藏菩薩像 ケルン東洋美術館」〈水野敬三郎編『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇』六、二〇〇八年))

(a 地藏菩薩御身中奉納仏経等目錄)

地藏菩薩御身中奉納仏経等目錄

仏舍利一粒

一寸六分金銅釈迦像一体 奉摸巖峨尺迦

一寸六分金銅阿弥陀像一体 奉摸真如堂阿弥陀

一寸六分阿弥陀像六千体 摺仏

六寸 地藏菩薩像一千体 摺仏

(中略)

建長元年(己酉)歲十一月廿四日

願主僧西信(花押)

(b 願書)

南閭浮提大日本国山城国深草郷地藏院住僧西信為拔濟／六道衆生利益法界群類殊堯大誓願所奉造立二尺／五寸地藏菩薩形也 抑此像者天台山楞嚴院先德／源信僧都所奉造立像奉摸之見賢欲濟故也方／今堯大願云(中略)／彼智滿法師所造像入猛火中更無被燒而／救不可說若于地獄之衆生仏子所造之像可同彼像之為／円満功德成就善根仏舍利一粒一寸六分金銅尺迦阿弥陀像／各一体阿弥陀地藏像各一千体摺仏多種陀羅尼諸大乘経／等御身中所奉籠也(中略)

建長元年(己酉)歲十月十五日(奉造始之同十一月廿四日奉納)

此願書

願主僧西信（花押）

大仏師法眼康円（花押）

【史料11】宮内庁書陵部本『法華山寺縁起』（『図書寮叢刊 伏見宮家九条家旧蔵 諸寺縁起集』宮内庁書陵部、一九七〇年）

（前略）

金堂石像大聖不動明王者、因縁待於時不期而自来（委旨在別紙）仍造立半丈六木像、所奉納件像也、大日如來、先年渡海之時、洋浪破梶之日、発種々願、而誓擬御素木、既遁惡風而收大唐福州菅唐山、仍帰朝已後、用此梶所造立之像也、以同木造立一寸六分尺迦・阿弥陀・藥師・弥勒・觀音・文殊・地藏・不動・大威德像、奉籠御身中已了、皆渡海之時立願形像也、（後略）

【史料12】「弘安六年等身白檀大日如來像造立願文」（野坂文書三四一、『神道大系 神社篇』四〇 嚴島、神道大系編纂会、一九八七年）

敬白

奉造立等身白檀大日如來像一軀

弟子任縁起之旨、嚴甚深之願、是以奉造立三寸二分同像一千軀、其三軀者、殊沐浴潔齋手自所造立也、取之聚之奉納胎内、一□^{（彫力）}
一札不覺渡下、

右、齋持此仏像為行路之資、赴芸州之境、詣嚴嶋之社、敬「」軌儀、即展供養之齋席、亦奉安置弥山、可飾秘密壇、（後略）

【史料13】近衛兼経『岡屋関白記』（東京大学史料編纂所編『大日本古記録』一八 岡屋関白記、岩波書店、一九八八年）

（寛元四年（一二四六）二月二十五日条）

廿五日、乙酉、晴、今日奉造始愛染王像、三尺、御衣木加持行遍僧正、又奉造塔形木、随意慢陀羅令図繪之、

（同年四月十九日条）

十九日、戊寅、天晴、

早旦向堀川、見廻堂方、堂廊ニ愛染王奉安置之、仏師院誉賜祿、明日可奉供養也、且明日ウルハシク可奉居之、千鉢愛染王同安置之、（人々奉造之、）奉籠愛染王像中物、仏舍利一粒、五仏舍利・五仏種子・法身偈・光明真言・本尊真言、已上各書紅梅薄様納金篋、（舍利同之、）（後略）

〔同年四月二十日条〕

廿日、己卯、天晴、今日愛染王供養也、午時許向堀川、件仏奉安置丈六堂廊、〈堂未造畢、〉頃而導師行遍僧正来、則有開眼事、千駄像并瑜祇經一卷同供養、(後略)

【史料14】実叉難陀訳『地藏菩薩本願經』卷上 分身集会本第二(『大正藏經』一三—七七九b—c)

爾時百千万億不可思不可議不可量不可說無量阿僧祇世界、所有地獄處分身地藏菩薩、俱来集在忉利天宮、(中略)爾時世尊舒金色臂、摩百千万億不可思不可議不可量不可說無量阿僧祇世界諸分身地藏菩薩摩訶薩頂、而作是言、(中略)其有未調伏者隨業報底、若墮惡趣受大苦時、汝當憶念、吾在忉利天宮殷勤付囑、令娑婆世界至弥勒出世已来衆生、悉使解脫永離諸苦遇仏授記、爾時諸世界分身地藏菩薩、共復一形涕淚哀恋白其仏言、我從久遠劫来蒙仏接引、使獲不可思議神力具大智慧、我所分身遍滿百千万億恒河沙世界、每一世界化百千万億身、每一身度百千万億人、令歸敬三宝永離生死至涅槃樂但於仏法中所為善事、一毛一涕一沙一塵、或毫髮許、我漸度脱使獲大利、唯願世尊不以後世惡業衆生為慮、(後略)

〔註〕

註1 倉田文作『像内納入品』(『日本の美術』八六)至文堂、一九七三年、奥健夫『像内納入品』(上・下)(文化庁監修『国宝・重要文化財大全』三・四〈彫刻上・下〉)毎日新聞社、一九九八・一九九九年。増補のうえ

「像内納入品小史」と改題、『仏教彫像の制作と受容—平安時代を中心に—』中央公論美術出版、二〇一九年、所収、瀬谷貴之「総説 仏像からのメッセー—像内納入品の世界—」(『仏像からのメッセー—像内納入品の世界—』展図録、神奈川県立金沢文庫、二〇二一年)、小野佳代「2020年度・尾張地方の仏像調査報告—一宮・薬師寺の本尊薬師如来坐像と胎内仏の紹介—」(『共生文化研究』六、二〇二一年)。

註2 拙稿「小仏像の像内納入について」(科学研究費助成事業基盤研究〈C〉研究成果報告書〈研究代表者佐々木守俊〉『仏像の聖性を保証する像内納入品の機能に関する研究』二〇二〇年)。

註3 西口順子「承元二年多武峰大織冠像焼失をめぐって」(中西智海先生還暦記念論文集刊行会編『仏教と人間 中西智海先生還暦記念論文集』永田文昌堂、一九九四年。『平安時代の寺院と民衆』法蔵館、二〇〇四年、所収、註2拙稿)。

註4 山本勉「如意輪観音菩薩像 吉祥寺(井上自治会)」(水野敬三郎編『日本彫刻史基礎資料集 鎌倉時代 造像銘記篇』(以下「鎌倉時代造像銘記篇」)一四、二〇一八年)。

註5 拙稿「三宝山定海の吉祥天造像(河野元昭先生退官記念論文集編集委員会編『美術史家 大いに笑う—河野元昭先生のための日本美術史論集』ブリュッケ、二〇〇六年。『平安仏教彫刻史にみる中国憧憬』中央公論美術出版、二〇一七年、所収)。

註6 大河内智之「歓喜寺地藏菩薩坐像(胎内仏)について」(『和歌山県立博物館研究紀要』一七、二〇二一年)。

註7 註6大河内氏論文。

註8 註2拙稿。

註9 「三十八 隋の京師日嚴寺の瑞石影像の由来」(肥田路美編『美術史料として読む『集神州三宝感通録』—釈読と研究—』一〇、早稲田大学

- 註10 大学院東洋美術史、二〇一七年。日嚴寺の研究史は同釈説の註「(23)日嚴寺」(大島幸代氏執筆)に網羅されている。
- 註11 熊谷麻実「(31)仏像の頭頂に奉安」(註9「三十八 隋の京師日嚴寺の瑞石影像の由来」)。
- 註12 稲葉秀朗「隋日嚴寺瑞石影像考―そのかたちの検討と転輪聖王」(註9肥田氏編書)。
- 註13 西林寺像への石影像安置のほか、常謹(生没年不詳)『地藏菩薩応現記』所収「唐簡州鄧侍良家杖頭地藏感応記第十」には、放光の奇瑞をしめした地藏菩薩の「五寸像」のために「等身像」を造り、五寸像を納入したとの記述がある。梅津次郎「常謹撰『地藏菩薩応現記』」(『大和文化研究』一〇〇、一九六六年。『絵巻物叢考』中央公論美術出版、一九六八年、所収)。
- 註14 根立研介「阿弥陀如来像 清水寺」(『鎌倉時代造像銘記篇』五、二〇〇七年)。
- 註15 註1奥氏論文。
- 註16 註2拙稿、「法隆寺聖霊院聖徳太子及び侍者坐像と像内納入品」(板倉聖哲・高岸輝編『日本美術のつくり方―佐藤康宏先生の退職によせて』羽鳥書店、二〇二〇年)。
- 註17 『大正蔵経』一四一四八〇c。
- 註18 山本勉「運慶の軌跡」(山本勉監修『運慶大全』小学館、二〇一七年)、拙稿「鎌倉時代の院政と宗教美術」(増記隆介・皿井舞・佐々木守俊「天皇の美術史」一 古代国家と仏教美術、吉川弘文館、二〇一八年)。
- 註19 瀬谷貴之「文殊菩薩坐像(文殊五尊像のうち、像内納入品)」(註1神奈川県立金沢文庫図録)。
- 註20 山口隆介「X線CTスキャン調査により得られた像内納入品に関する知見」(『文殊菩薩騎獅像(京都・大智寺所蔵)のX線CTスキャン調査』奈良国立博物館、二〇二〇年)。
- 註21 宇代貴文「護法童子立像及び像内納入品」(東京国立博物館・九州国立博物館・京都国立博物館・読売新聞社編『伝教大師一二〇〇年大遠忌記念 特別展 最澄と天台宗のすべて』図録、読売新聞社、二〇二一年)。
- 註22 山口隆介「聖徳太子像の造像と救世観音」(奈良国立博物館・東京国立博物館・読売新聞社・NHK・NHKプロモーション編『聖徳太子と法隆寺』展図録、読売新聞社・NHK・NHKプロモーション、二〇二一年)。
- 註23 水野敬三郎「地藏菩薩像 福智院」(『鎌倉時代造像銘記篇』七、二〇〇九年)。
- 註24 『大正蔵経』三九一六九六a。『大日経疏』における「円明」の用例は、北尾隆心「円明」について(真鍋俊照編著『仏教美術と歴史文化』法蔵館、二〇〇五年)を参照。
- 註25 拙稿「月輪の像内納入について」(『仏教芸術』六、二〇二一年)。
- 註26 「真見仏」については、玄奘(六〇二〜六六四)訳『大般若波羅蜜多經』に「若以此等真如之相、觀於如来名真見仏」(『大正蔵経』七一九六四b)とあることも参考になろう。
- 註27 伊東史朗「毘沙門天立像(胎内仏)」(伊東史朗責任編集『日本美術全集』四 密教寺院から平等院へ、小学館、二〇一四年)。
- 註28 根立研介「大黒天像 西大寺」(『鎌倉時代造像銘記篇』七、二〇〇九年)、註1瀬谷氏論文。
- 註29 瀬谷貴之「大黒天像」(註1神奈川県立金沢文庫図録)。
- 註30 奥健夫「大日如来像 宝満寺」(『鎌倉時代造像銘記篇』一五、二〇一九年)。
- 註31 心月輪の研究史は註24拙稿を参照。
- 註32 横川耕介「甚目寺愛染明王坐像調査報告書」(『調査報告 重要文化財甚目寺愛染明王坐像』甚目寺観音、二〇一二年)。
- 註33 見田隆鑑「愛染明王の像内納入品と像内の莊嚴について」(註31甚目寺編書)。
- 註34 山岸公基「甚目寺愛染明王坐像とその造像環境」(註31甚目寺編書)。
- 註35 註32見田氏論文。
- 註36 西川新次「胎内仏」(『国史大辞典』八、吉川弘文館、一九八七年)は、胎内仏納入の目的を「造像の志趣を明らかにしたり、願意を確かなものにしたたり、像に固有の性格を付与する」としたうえで、本像の胎内仏にふれており注目される。

- 註36 岩田茂樹「地藏菩薩像 伝香寺」（『鎌倉時代造像銘記篇』四、二〇〇六年）。
- 註37 杉山二郎「伝香寺裸形地藏菩薩像について」（『MUSEUM』一六七、一九六五年。『日本彫刻史研究法』東京美術、一九九一年、所収）、註35西川氏解説、註36岩田氏論考。十一面像が「仏宝」ではなく「僧宝」にあてられているのは、菩薩がまだ修行の階梯にあることを僧侶と同一視したものと考えられる。
- 註38 奥健夫「源信造立の地藏菩薩像に関する新史料」（『仏教芸術』二六九、二〇〇三年。増補のうえ「五境の良葉」を納める地藏菩薩像とその周辺」と改題、註1同氏著、所収）、根立研介・奥健夫「地藏菩薩像 ケルン東洋美術館」（『鎌倉時代造像銘記篇』六、二〇〇八年）。
- 註39 奥健夫「地藏菩薩像 寂光院」（『鎌倉時代造像銘記篇』四、二〇〇六年）。像内の小像は板状で、X線撮影により存在が判明する。岩田茂樹「地藏菩薩像 長命寺」（『鎌倉時代造像銘記篇』七、二〇〇九年）。
- 註40 皿井舞「京都・神光院蔵 木造地藏菩薩立像」（『美術研究』四〇八、二〇一三年）。
- 註41 拙稿「地藏菩薩立像胎内納入品」（『救いのほとけ―観音と地藏の美術―』展図録、町田市立国際版画美術館、二〇一〇年）。
- 註42 岩田茂樹「馬頭観音菩薩像 浄瑠璃寺」（『鎌倉時代造像銘記篇』五、二〇〇七年）は、像内の馬頭観音小像および馬頭観音像残欠を平安時代後期（十二世紀）のものとみており、「現像は破損した古像の再興像である可能性」を指摘する。
- 註43 山岸公基「赤岩寺の仏像」（『豊橋の寺宝Ⅱ 普門寺・赤岩寺展』図録、豊橋市美術館、二〇〇二年）。
- 註44 林温「千体地藏菩薩図について―南都仏画考五―」（『仏教芸術』二四一、一九九八年）。
- 註45 註12梅津氏論文。
- 註46 『続々群書類従』一五。
- 註47 豊田裕章「水無瀬離宮（水無瀬殿）の空間構成と機能について」（『研究紀要』三二、京都女子大学宗教・文化研究所、二〇一九年）。
- 註48

On placing newly made Buddha statues inside the other

SASAKI Moritoshi

Abstract

There are many known examples of old Buddha statues with spiritual value being placed inside the other. However, the Buddha statues (*tainaibutsu*) that are stored are sometimes newly made. The purpose of this paper is to examine the significance of placing newly made Buddha statues inside the other.

Standing Kichijoten (Skt. Śrī-Mahādevī) in Kichijoji temple and Seated Jizo Bosatsu (Skt. Kṣitigarbha) in Kangiji temple are examples of new statues placed inside. In this case, it is possible that existing old statues were used to protect the smaller ones. However, in the case of Standing Amida Nyorai (Skt. Amitābha) in Seisuiji temple, it is certain that the inner and outer statues were made at the same time. The main subject is not the small statue made of bronze inside, but the outer wooden statue. A similar case is the golden statue, which was described in *Gyokuzui* and ordered to Michiie Kujo by Sonsho. Referring to the theory of *Bussetsu Monjushirihatsu Nehankyo*, in these examples, it must have been recognized that the small statue inside another one was the genuine existence. The most symbolic example of placing a genuine existence inside a Buddha statue is the work in which the statue is identified with a *Shingachirin* (the soul of Buddha). Examples such as the Daikokuten (Skt. Mahākāla) in Saidaiji temple fall under this case.

On the other hand, the purpose of placing statues inside some statues, such as Jizo Bosatsu in Denkoji temple, cannot be immediately determined. These cases seem to express a certain special meaning by combining the inner images and the outer image. According to the *Hokkesanji Engi*, Keisei made the statue of Dainichi Nyorai (Skt. Mahāvairocana) and nine small statues from the same timber, and nine small statues were placed inside the statue of Dainichi Nyorai. In this case, it is thought that the combination of the Dainichi Nyorai statue and the nine statues inside has no specific meaning.

It is also known that the large number of small identical statues were placed inside the other. Based on *Jizo Bosatsu Hongankyo*, the “Sentai Jizo” (One thousand Jizo) such as standing Jizo Bosatsu in Jakkojin temple and small statues placed in it is considered to represent the scene in which the many alter egos of the Jizo who spread all over the world gather together and return to one body.

The production of two Buddha statues at the same time, one inside the other, means that the adoption of an internal and external dual structure was planned from the beginning. It is presumed that the double structure guarantees the spirituality of the Buddha statue.

